

2000年度 図書館の動き

利用規則の平準化と「どこでも返却」の実施

1999年4月より図書館運営担当理事の諮問機関として発足した図書館行政懇談会は「図書館サービスの質的な向上と量的な拡大をめざすことを前提とし、より効率的な図書館資源の活用と利便性の拡大をはかることを目的として、中央図書館およびキャンパス図書館における図書貸出にかかる利用規則を各館共通とし平準化をはかること」として答申をとりまとめた。答申を受けて図書館では中央図書館および高田記念図書館、戸山図書館、理工学図書館、所沢図書館において、①利用者レコードの統一、②貸出上限冊数の平準化、③罰則の平準化、④貸出延長回数および手続きの平準化、をはかり、2000年6月1日から実施にうつされた。このこととあわせて、図書館では、利便性の一層の向上をはかる趣旨から貸出館にかかわらず、学内どここの図書館でも貸出図書の返却手続きをうけつける「どこでも返却」サービスを続く7月1日から開始した。さらに、従来より強い要望のあった中央図書館研究図書の学部学生にたいする日本語図書貸出について10月2日よりサービスを開始した。

西早稲田キャンパス学生読書室のWINE参入

うえでのべた図書館行政懇談会の議論のなかでは、利用規則の平準化にかかわる検討とあわせて、西早稲田キャンパスの各箇所学生読書室および研究所等図書室の分散的な管理・運営体制ならびにそこで提供されるサービスについて一定の方向性を出すべきとの指摘があった。西早稲田キャンパスの各学生読書室は、各箇所独自に図書館パッケージシステムを運用していたが、2001年度から順次リースアップの時期をむかえることからこれを契機としてWINEネットワークに参入することにより箇所ごとにかかっていたシステム運用経費の節減をはかり、あわせて各学生読書室のネットワーク参入による機能的統合をすすめることとした。もとより西早稲田キャンパスの各箇所学生読書室はそれぞれ学部等各箇所が所管しているが、今後、これら学生読書室と中央図書館およびキャンパス図書館の一層の協力、連携がすすめられることとなる。なお、2001年3月より社会科学部学生読書室から順次、ネットワーク参入の作業をすすめ、2002年度初頭をめどに作業を終了する予定である。

Web of Scienceをはじめとした外部データベースの導入

近年、ネットワークを利用した電子媒体による学術情報の利用は大学における教育・研究活動支援、とりわけ図書館サービスの展開のうえで必要不可欠のものとなりつつある。図書館としては、OCLC FirstSearchサービス導入(1996年)をはじめとして、平凡社世界大百科事典のネットワーク版である「ネットで百科」などの各種学術情報データベース、さらに、各種のフルテキスト電子ジャーナルや各キャンパス図書館におけるキャンパスLANを利用した各種学術情報提供サービスなど、こうした電子媒体による学術情報の提供にかんして努力をつづけている。2000年度には、特に自然科学系の研究者から強い要望のよせられていたWeb of Scienceを教務部などの関係箇所の協力もえながら導入することとし、10月よりサービスを開始した。これら以外にも導入を予定・検討しているデータベースも数多い。

しかしながら、ネットワークを利用した電子媒体による学術情報の提供には、多額の費用がかかることも事実である。とりわけ昨今の電子媒体による学術情報の導入にかかる予算執行にかんして、現在の図書館関係予算交付と執行のしくみがおおきな障害となりつつある。大学全体の財政状況が厳しさをます昨今、学内における学術情報資源の共同利用をさらに促進する方策を検討する一方で、学外諸機関との共同ないし連携も模索する必要性が生じている。電子媒体による学術情報の導入といった事例にとどまらず、学術情報資源の共同利用という観点から、大学全体の図書館関係予算のあり方について検討する時期にきている。

※「Web利用によるデータベースの導入」(P.4～P.5) 参照。



「アクティブライブラリ構想」と「統合マルチアーカイビングサービス」(IMAS)の完成

1999年10月、「21世紀の教育研究グランドデザイン策定委員会」に、図書館は「アクティブライブラリ構想」を提案した。構想では、WINEを基盤として、しかし必ずしもWINEの枠にとどまらずに、WWW情報源、電子媒体による学術情報資源などを射程に入れた教育研究と図書館システムの一体化をめざし、いわば、利用者の欲する資料を「いつでも」「どこでも」「何でも」可能とするシステムをめざすとした。図書館では、教務部情報企画課などとも協力して1999年12月に「統合マルチアーカイビングサービス」(IMAS)プロジェクトを発足させ、「アクティブライブラリ構想」実現にむけた取組みをすすめた。このプロジェクトにたいしては、1999年度政府補正予算による補助金が交付された。なお、2001年3月30日には完成記念披露式典が学内外関係者を集めて盛大に開催された。

IMASは、「フィジカルアーカイブ」と「デジタルアーカイブ」から構成される。「フィジカルアーカイブ」は、中央図書館地下3階に増設した自動化書庫システムのことをさし、コンピュータによって種々の資料(図書、マイクロフィルム、CD等)の出納を管理し、約50万冊の資料を収蔵することが可能である。また中央図書館内のWINEシステム検索端末からも、出庫請求を行うことができ、集密移動式書架とコンピュータシステムとの連動により、スペースの節約と省力化が実現した。「デジタルアーカイブ」は、統一インターフェイスから、様々な情報源(WINE、ホームページ、百科事典、雑誌記事、学内構築データベース、音声・映像・画像などデジタルコンテンツ、早大教員の研究活動状況等)の統合的な検索を実現した。IMASは、2001年4月より本格運用にはいっており、図書館としては今後とも、利用者の多様な要求にこたえるために、情報アクセス手段の充実に努めていく所存である。

※「早稲田大学マルチアーカイビングサービス(IMAS)の導入について」(P.6~P.12) 参照。



図書館行政懇談会(第二次)の設置

図書館運営担当事の諮問機関として2001年度より、図書館行政懇談会(第二次)を設置することとした。そこでは「全学的に使いやすい図書館」、「利用者サービスのさらなる向上」、「予算のより有効な活用」を目的とした図書館行政懇談会(第一次)での成果をふまえて、さらに、全学的な視野にたつて、この目的を達成するために必要な図書館行政のあり方について討議していただくことになる。今回の懇談会では中央図書館、キャンパス図書館および各箇所図書室のさらなる連携・統合をめざして、全学図書館システムの管理・運営面について改革・改善の方向性について積極的な提言を期待している。具体的には①図書館予算のあり方、②キャンパス図書館・箇所図書室等の分野別再編のあり方、③雑誌バックナンバーの集約・共同管理のあり方と雑誌センター構想、④他大学・他機関図書館との連携・協力体制(コンソーシアム)の模索、などが検討の柱となる。